「参佰拾壱歩の道奥経（サンビャクジュウイチホノミチノクキョウ） 個的弔いの儀（コテキトムライノギ）」

〈弔い事にむけて〉

ぼくは、荒浜が怖くなった。だけど、昔の友達の荒浜に会いに行かなくてはならない、と思った。11年後の3月11日に。

7年前は、封鎖されていて、入れなかった。バリケードを越えてまで入る気にもなれなかった。遮断されて、逆に、ほっとした。何だか、とても怖かったからだ。

バリバリの晴天。地下鉄を降りると、追悼式で、線香たなびく献花場があった。ぼくは、場違いな人間な気がして萎縮した。入れなかった。

バスは1時間に1本しかないと知らなかった。目の前を出発して行ったばかりだった。それでも、多いほうのはずだと、後で、おふくろに話したらそう言われた。歩いたら、1時間くらいかかりそうな距離だった。だから、荒浜小学校までタクシーに乗った。

長い土手の横を走って、小さいトンネルを抜けて、坂を上がると、荒浜小学校が迫り上がってきた。ど迫力に面食らった。おかしい。地形が変わっている。驚いて、タクシーの運転手さんに聞いた。防波堤代わりの土手道路（嵩上げ道路、復興道路）が10キロぐらい伸びている。7年前は、何もなかったのに。人類は、危険から身を守るためなら、短期間で、これだけのことができるんだ。21世紀凄い。観光客なわけではないが、ぼくはただのミーハーだった。

住んではいけない地域になっていることも知らなかった。店も、コンビニもなかった。あるのは辛うじて、飲料の自動販売機だけだった。荒浜の小学校の前には、小高い丘も出来上がっていた。荒浜小学校では、噂に聞いていた「HOPE FOR Project」のスタッフらしき人が、校内で、風船を膨らませていた。

駐車場にはまだ、ポツポツとしか人は来ていない。コロナの影響で、大々的には、イベントができないとも聞いていたが、やはりあるのだ。荒浜小学校は、整備されていた。7年前は、防護ロープを張られて、人もおらず、波に扉を破られた薄ぐらい洞窟のような教室が、正直怖かった。よく見ると、裏の方に人が入っていく。入れることを知らなかった。中は、津波の跡が、地層のように水跡を残していた。1階から順に見て回った。2階で鉄柵が曲がったまま残されていた。屋上に上がると、太平洋が広がって見えた。ただ、ただ、美しく、牧歌的な海に見えた。青空と青い海と白く横長な砂浜。海岸を俯瞰したのは、初めてだった。広い。解放的だ。草食系にしかみえない太平洋に肩透かしを食らった。

駐車場で、イベントスタッフがマイクテストをしていた。声がブワンと倍音で響く。

荒浜を目指した。震災遺構として残された住宅基礎、家の痕跡たち。昔は、美しく童話のようだった松林は、7年前と同じく、ひしゃげ、根こそがれ、へし曲がっている。無理やり、引きちぎられている。この松林が、ぼくに海の圧を感じさせる。砂浜を歩く。防護柵は取り払われている。てことは、引き返しようがない。土手を上がるに連れ、海鳴りが強くなる。風の座布団で窒息しながら、突然、顔面に海が広がった。

あ、海だ。

昔、中学、高校のころ、片道8キロ歩いて、2、3ヶ月にいっぺんくらい来ていた。歩く訓練と、海が見たいのと、ゴミ袋1枚で、野宿の訓練をするために。いざ、問題が起こっても困らないように。夜は松林と月明かりがきれいで、ほぼ、誰もいなかった。

久しぶりに歩く砂浜は砂漠のように広かった。海に近づくと海鳴りが轟音だった。チラホラ海岸を歩く人がいた。僕は緊張した。波に飲まれるかもしれない。バチが当たるかもしれない。殺されるかもしれない。

百均で買った大きいビニールバッグの中にはバケツヘッドが入り、肩にはビデオカメラの入ったバックを掛け、白ワイシャツにノーネクタイ、黒い喪服を着たぼくは、なるべく、ひと気のないほうに、ゆっくりと南下した。海に埋まったテトラポットが途切れたところで、おそらく弔いびとであろう波打ち際を歩く人はほぼいなくなった。ぼくは一体何をしにきたのだろう。いい年こいたドアホなのではないのだろうか。

きっと、歩いていれば、場所がここだと教えてくれるはずだ。木の枝を拾った。いい感じに皮が剥けて白い。何度か、枝を砂浜に刺した。何か、違っていた。

5回目、あ、ここだと思った。荷物を砂浜に置き3日前に通販で買った、小型船舶用のライフジャケットを着た。オレンジ色がアホみたいだ。だけど、念のため、恥ずかしくても、長時間いる場合は着ることにしていた。海に背中を向けることが怖かったのだ。ぼくは海に食われるかもしれない。不謹慎だ。仙台人として、これでいいのだろうか。もう東京に棲んでいる時間のほうが長い。ビデオカメラを三脚にセットし、バケツヘッドを被って、RECボタンを押した。

2022年8月19日　宙崎抽太郎